丹鶴叢書

草根集　三

093.1
2006
佛教大学図書館
2005494771

宮内庁書陵部

草根集第三

永享五年正月朔日雨山をかすめて春の雨ふる

元旦雨

二日ふる雨に風ふきて雪まじりてまのあたりの雪のうち

元日

かすかにしかの家ぬしとてふりかくしぬる雪の朝

三日主上御元服とてこの頃はかりまれなる風も

をさまりてこの春のつねなく日の永はてをの乗

り出ぬ雪のうちにはかすかにうぐひすのこゑ

四日つきもくれハ百代をあらはせる人もはかりまれなるの

ふるとなく玉躰の御ものもて及ばせたまふ

明治宮内省図書寮

七日兼祐法師のもとにて春なりとく詠ずるを

三春　わかなつむ人を待とやあしたのはらに雪はきえぬらん

三月　雪きえぬ山さくらとてもたなびきにけりみねの白雲

名所述懷　花の波よるとなる神のこゑかはさてもあるをせをかしの

八日草庵の月はなをなし

三春日　ながきあさ世のやどにる春の春なるる新旨新の家

雪消松緑裏　松殘雪　景のやはらの春のあらたなるまて又たにるこゑ

當座　寄都祝　たてまつるもちやるの新る我はてものの氏の松ぞ

若菜　つむとなにのまとやうもんかてまみのもの自を

蛍　あつ野の宮の忍も九の枝のしてのまとたのまれ

瑞籬　なとのまをたむけ数もつきのくなるぬ神やうけん

十日右馬頭の家の月はなを

砌下有松　千ちとせ宿やはつとあくれは新の松は鶴の住をる

霊花　盛　庭の花ものこりもしてつくもはのるまるの白雪

顕　恋　ながきをのかるとゆの松のくはのみつくこゑの月

田　家　家の前の松の山風をかるなのさふるなのこゑの庵もなし

十二日草庵ハ畠山阿波守同右馬頭山名中務大輔下

堅入道素明同左馬尉氏数なく使いく詠ずるゆ

霞滿村　陽一本　初霞ものもつのもとやたつ川の波のこゑ松ら

江月冷　新月きよき江の月のみかふ雲なきのちの世

驛路雪　ふるの山やまたちの杉ハ雪なれし月もむ梅の花ふる舟

宮蓬　苦楽　さしよせの宮ゝまつ蓬ゝ雪ふれて花も梅ふる袖

轉中衣　月をつゝ（ても一本）旅なる宿とゝ友のあさてゝまつさもの衣

廿六日阿波守の家の月ゝ

池邊松久　庭ふるさ波のゝのちゝ清し松のやよの蓬つるむ

山春月　ふるまゝ嶺ゝ山も月ゝくれハ春ゝ雲のゝ

恋久　つゝ雲をたゝむ涙の玉柏なるとゝ月ゝ神ゝくもり

山家橋　ふるゝ人をいとくゝ山もゝのかゝものゝ板橋

二月三日草庵の月ゝ

梅風　遠ゝの家ゝ山ゝ雲ふむ雲ゝ風ふむ雲ゝ梅ゝ遠ゝ

春月　二月ゝ春の春ゝむの月ゝ氷ゝ春ゝ月ゝ

近恋　つゝ雲ゝ山ゝ中ゝ恋ゝ

當座　春濱霞　あらゝ山ゝ月ゝ波ゝ濱ゝ霞ゝ

冬恋　かゝ人ゝ人ゝ雪ゝ雪ゝ

夜釈教　ゝ釈ゝ教ゝ

十四日十論院の月ゝ

梅　吹ゝ梅ゝ谷ゝ

待花　ゝ人ゝ花ゝ

路芝　ゝ芝ゝ

當坐
故郷梅　なつかしき小屋のの[illegible]火[illegible]風ふ烟[illegible]ハ梅[illegible]

宮匣恋　[illegible]中ハ大和[illegible]匣[illegible]

旅泊夢　伊つ[illegible]

三月二日斯波左馬頭佐氏有家（義一本）

山晩霞　夕[illegible]山の[illegible]

花交松　[illegible]

忍忘恋　[illegible]

當坐
山霞　[illegible]

恨　恋　[illegible]（八葉）

社頭杉　[illegible]

子規

三日草庵の月次ふ

山花似雲　[illegible]

三月三日　[illegible]

夜涙餘袖　[illegible]

當坐
橋下花　[illegible]

宮櫛恋　[illegible]

祝　言　神の世のあまてる月あこ月あこふ[illegible]（文葉一本）

八日永明院の花をとゝ侍るに

[illegible]花の上なる[illegible]

十日海[illegible]寺の[illegible]観音寺の花をとゝ侍る

さきのとしも此ころのことにや十日餘りに法花堂へまかりて見し事を
去年はかく命あらはたのめしもちりぬ花の陰の外
みちよりて吉野の山のさくらを見ん侍るらく
またのとしさく花とそへんも春すくいかなして峰の白雲

岩蔵にて

櫻花咲てはちらぬ世なりともなほさそはんにあはれやはなき

大原野へ夕つかたまかりてこえ侍る花見にまかり出家
殿のかたしく神なまの拍子しくは嵐の落るまてまとめ
ふる雨にぬれつつやうにふりくやまての月影さえける
く花の露も見のこしたるやうにあかくありてさく木の

子抄

花の雲よりつめし木のもともふみなし津やさしさそへ返し

風情にはことなるそ侍らし

一本此詞書異岩蔵にて上ニアリ

道をとる鳥も白ふむる神の社をとふくちる櫻かな

真花堂院にて若法和尚の庵新なる所を夜して庭

のもちらは木影なるに

散らはなと思ふ人のなからんあとにはなにを花かさす路の白雲　も一本

十一日當座にてよみ侍りし　中一本

寄玉花　おく露かは何そは花の玉のをにかかれやすくもちる櫻かな

寄枕花　此世にはまたやねもの夢にはふ春の花枕の夢を放さて

寄琴花　春は行花のさそふ風にまかせてのちは下にかすむる琴の音の春風

寄伐花　山伏ら[illegible]てのまるを伐あく[illegible]ものの風
其比の波まる子息法印か浦義有少[illegible]ふまる百[illegible]
社一本
[illegible]

霧

[illegible]春のかすみ[illegible]

時鳥

[illegible]

霧

[illegible]

落葉

[illegible]

忍恋

[illegible]

述懐

[illegible]

中務大輔硯屏ニ梅の花ふ[illegible]

ふ人のたちくさ[illegible]

[illegible]

梅のさま惟肖和尚ニ賛を[illegible]詩

曳杖立槁頭　無風香暗浮　去波如有恨

踈影不随流　[illegible]

[illegible]

卯月三日草庵月次

首夏　[illegible]

待時鳥　[illegible]

憂恋　[illegible]

當坐

菖蒲　さゝれいはをやめまもるくさゝふの糸さくもさ彩の玉あ

山家恋　わるさの袋のあるとてもこゝろとゝまるとゝ人めをるこゝろ山の陰うハ

江蘆　まこもかる入江の小船延のうけあてかくもゆる浦糸

七日治部少輔八幡宮ゝまる百首ゝとて兼盛ゝ中小

立春　やゝゝ山もとゝ人のこゝろとゝる月新や霧ゝ初ゝ春

杜若　さゝ浦も霧める沢の杜ゝいまゝつひよもをるゝてもむ

蛍　見ゝ出ゝそ雲のよゝゝ杜風ゝゝ清ゝのをまゝ

月　ゝゝゝゝ杜やいくをなくさめて出をゝもむ文級の月

苅萱　わのつゝゝふゝゝゝのゝれも時ゝゝゝゝ見ゝをのかゝ

千鳥　下わの井四ゝゝ井ゝゝ見を寄みゝるたつなゝ

初恋　ゝゝ移の袖の露の野居い枕ゝとハ知ゝいかけいよ

松　ゝ居ゝ小屋居ゝゝ家ゝゝかゝをゝゝ岩陰の松

別　いゝゝのゝゝ別ゝゝゝて一袖のゝなる家の袖ゝ

十九日宮ゝ親苗ゝ尾ゝゝめて来て一袋ゝめ小

夏風　彩ゝゝて巻る山袋ゝとゝゝん家ゝゝ別家ゝ

夏木　雨ゝる雲のゝのゝまゝゝゝれの袖のゝゝ岩ゝ

夏枕　ゝゝるせゝゝゝるの苔むゝゝ枕ゝ夜ゝゝゝぬゝゝ

五月三日右馬允の家ゝゝ衰議ゝゝゝゝゝゝ合

せゝ小ゝ多勝負を付侍る

月前時鳥　四ゝる間ゝゝる袖のゝゝゝゝゝゝゝゝいゝる月かゝ

杜五月雨　丹生の川よどまで水まさる杣つたひいかだくだすのさゝれ石

社頭松嵐　松風も昔にかはる世ならねや猶のこゝろはちはやぶるの松

名所夕月　橋柱ふりぬる名のみ残りけり江や芦のまの月そ見えけれ

廿七日草庵の月次了一本

螢飛水上　瀧川や浪もくゞる石の上にみだるゝ螢のかげ

了一本

古寺松風　いにしへのかねやまつる松の声の音をも風を清み吹く

うけ一本

當座

海邊霞　あまの家たちまよふ伊勢の海の汐干の霞やはるゝ捨小舟

花春友　咲なるものはとはむ人をゝもの友とやはちの友となむ

新樹　ふる葉友よりも木のまのさえかゝる風の音の木

寒風夜　さゝ八こそ聞くもけるあさき袖にかれん風の吹くへきて千よ

暁山　岩くゝまさる月の桂やふむらの山の松の杉原さ

名抜

廿八日人々とゝもにひく時鳥をきかんとてやみぬるを

つゝみてる雄神護るにまうでて侍るに仁和寺よりの車

あまたつらなりて山よりおりて時鳥なく鳴侍れハ

宿にいて日暮て時鳥なきつる初音を

其夜六五兄院に坊にまうでてつれなる人二三人歌を捺て

河納涼　清瀧やいつもと夜はふし浪もすゞしむ袖の川の瀬

忍恋

見恋　見そめてさのみみるめハつゝまもしのりとせしかもさき

古寺　雨とさもやましとらふ都のかの鐘よおかん松ちよとむ

六月中の十日の比和文々右馬又所より山中よりとの

旅より入なきのおほん紙母をもてなし

[illegible]

[illegible]

十九日　親南[illegible]

早春霞　[illegible]

夕早苗　[illegible]

田上鳥　[illegible]

庭落葉　[illegible]

浦千鳥　[illegible]

寄草恋　[illegible]

[illegible]

廿五日　草庵の月[illegible]

夕立風　[illegible]

旅夏衣　[illegible]

初見恋　[illegible]

當坐雪　雀　[illegible]

月　[illegible]

水鳥　[illegible]

尋恋　[illegible]

[illegible]

家嵐　[illegible]

廿九日清水神護寺にまゐりて歌をさくらにて

夕立晴　やまたちはれてくもの間のあさやけにみしのやまのもの

恨偽恋　いつくるとこのつかるるとそのまゝの家のおもかげ

名所瀧　おちたゞのたきのなかれもたゆるとはみもたゝぬ法のるい

七月七日數里とらはるゝ

河早秋　かはの岸川やはの秋のあさのかぜぬるゝ秋風

七夕草　かちのそふおきるあとやさハかぬるの後のむつさ

聞恋　つまなるとせの契ましてもこゝ[き妻]ハ又やたゝ

山家　なるとせとて我ゐはいとゝ物ときの時のあるのもとゝ

十二日草庵の月ひる

初秋　以風のもとゝ家もむ老せのとゝもとゝ秋ハきぬるむ

薄露　ふるとゝ物とゝくなるくもの家の二むゝ雨雲ものとゝ

述懷　そのもむもとゝ行とて家のあるとゝ人なるくのな

故郷梅　なるとめゝ神のゝとゝ梅ゝもとゝの母ハるかとゝうゝの世

江月冷　みゝの家もはるゝの秋とゝ張ゝなゝ月あるのとて舟

寄境恋　ふかとゝゝとゝの家とゝあるとゝぬゝるの境ゝ[ゝも縁]ゝ

同十七日ゝ山ゝ祈祷とゝ神事をふとゝとゝて世

中とのとゝゝとゝつくの月ひるとゝもの仏とゝとゝ人ゝ

草庵ゝ家とゝゝ

夕　萩　秋の日とゝ家ゝゝとゝとゝのゝのとゝて萩のゝ風

恨絶句　[illegible]

獨述懷　[illegible]

サヲ東入道素明影ヲ[illegible]一座ヲ[illegible]

秋田　[illegible]

忘句　[illegible]

夕眺句　西の海や日[illegible]

閏七月二日中務大輔小山[illegible]猪熊なる[illegible]

都初秋　[illegible]

寄道句　[illegible]

古寺撞　[illegible]

八月十二日草庵の月ひろふ

月前露　[illegible]

月前鳴　[illegible]

寄月句　[illegible]

當座霜草吟虫　[illegible]

逢不逢恋　[illegible]

蒼海雲低　[illegible]

廿六日　伊波吉家の月次

月前風　以風のめぐみをさそふ海山も月まさやかなる秋のおとかな　有

田上鳥　ひぐらしの宮の杉ハ雨ふりて雲もむらくもあるのかなこの秋

寄道祝　安為のそり人もなくこのむらくてさたのこまある安

物撰の事　必定あるべしや

寄竹月　杉ばかりあるもこの景のてよ竹のまのく月をあはる

田家秋雨　民のこの山田のかりほの村雨よ雲を埋さめ山をなるかな

寄風恋　袖ふれて君がこゝろをかたらし風をふきなるかなも

隣里鶏　袖ふををやてゆるく鳥ともの人の里ハおるれてをきく

廿七日　中務大浦家ゆめ月次

山月明　ちみのゆる月ありけるまかれ嵐をくるる移の杉の枝

秋田露　さまてゆりいなをふかるる秋の田ハ袖をぬれ露

寄世祝　影の風ふるをを君ちのちをさまをる世をのちをとまる

初春　玉津しまやをを浦のををあつをををくををををを

薄　杉ばかの景のもをををのくあをれ消るを移のあを霧

寄煙恋　ををを思ふたつ烟をもあをををまをるを杉人

海路　漕ちをををつ母人ををををををををををを八波の白波

九月十三日海下寺　夜一本

山家月　新も杉世をあををををををかをを山ををる秋のをの月

月照滝　情をを袖をる月を結ぶををををを滝のをを

寄衣恋　[illegible]

隣里鶏　[illegible]

十九日[illegible]月次延引[illegible]を二條油小路の[illegible]

[illegible]

擣衣　[illegible]

蔦風　[illegible]

河鳥　[illegible]

海上雁飛　[illegible]

夕恋　[illegible]

心静延壽　[illegible]

廿六日細川右京亮持之の家[illegible]

[illegible]

[illegible]

帰鴈遥　[illegible]

海邊月　[illegible]

暁千鳥　[illegible]

歳暮　[illegible]

切恋　[illegible]

祝言　[illegible]

十月十日宗砌法師[illegible]

十弼持豊なと来たりし侍りしくおりよみしよ

早春雪　雲ゐまて緑栄る松かえにまちあへぬる雪乃むらきえ

暮秋菊　くみてしる秋もをやも月の日数なからる菊の下水

擣落葉　寒白き嵐にさそはれかきこの下にをる橘にちる木の葉かな

寄鏡恋　ひとるちかにきこぬ翁と見えしは文やかゞみのかけにむかひて

草庵雨　さゝのもの花咲きての庵にさて雨落てもあつきおきなむ

十一日赤松大膳大夫入道性具のもとにまかりて旅のやとりをもとめさりつるとてたちよりしのなとく又まかりくて

ちほりてはみくるふる法まとをかひてむ宿のつきそを

あかへし

身をうしの延喜のかよひちうとさまとなきのこゝひゐるちゝ風ふかや

十二日旅のやとりにまかりて月次ありて

松時雨　ちりては文とそめしとはいひても松に時雨のかふをふる山ゆき（や一本）

河千鳥　冬河の瀬によるるせもまもなき波をおもひぬ浪によるちとり

寄琴恋　くみきてなる琴のねをもこの中のをとるくとひかれや

当座
霞　むさしのも山のまそくてても消ぬをみてちる雲なるを

忘恋　あひしをも忘はせむは法ともふらすなくひりてしなめしを

擣　旅人のさるく衣かつ清く夕日そわたる嵐のかけるし

甚に阿波る右馬助なといとなかひく法勝寺とよ

寺まうくにおりよみしに

山冬月　ちるは秋のかたみに時雨し山のはの月の氷をさらす宇治の風

古屋霞　朽の軒枕の昔にかへるらくいく春かすみてふるきあれ

山家嵐　風しめくころ住居にみる空のいほにたゝる友はひとつにこゆり

往事夢　秋の夜のねられぬまゝに古への夢はさらにかなしかるらむ

同廿日院にまゐらせ給ひし世の中さわかしかりし頃秋霜にしもとめし清しめく下野入道喜明のもとより

おくられし

清やかきたにそひなかくるぬるやの山の秋霜

かへし

詠そなきこゑはきくれも秋霜はきこえぬさやの山のしら露

廿五日古今よみ侍し春日西洞院なる草庵文ある

所にかなしくかゝるもあらぬ

程あわれて立春をむかふにつけて八重をとくのみと泉かけ

その後文ある紅梅の花をの紅梅つけて手折侍る

人にわか中垣の梅にほふものにかゝりてみせさけ

あくし

なこのめの花を出めて宿にぬくみの垣ねに梅匂ふらん

十月九日草庵に始て人々まねきて五十首よみ侍りしに

立春　雲の中にはちよろつの神世にかはり天のかくやま

夏夜月　天の原雲路をまちてみしかよの月やとりしきさらにのこる

雪外鳥　よしのの山ふかきさとにすむ人のまれにとふべきこゝろをのたに衣さ一本

湊千鳥　難波潟みなとの浦の神のこゝろふるまふ事

寄夕恋　うらみてよまれしとしのよ夕べあるべき物のまとをを

暁　山　山のうへの雲のたゝずみかなしきはよるの月せるとん

神祇　ちはやぶるかみのいにしへのあらはる神のこゝろまもるせて

十二日　如例　十二月

都内初雪　ふるさとのもしの花のあとをたずねてこのもかもの

古寺冬月　古るとあるのあるの川きし汲やこゝろあるよ月新

海辺見鶴　うらの浦や波打ものをきゝたるよをもあしはせるの友鶴

当座　江上暮春　まをとゝぎすはつこゑまちてあしのやをあけぬ

閑庭薄　多のうへにもむ一むら薄秋せのまに秋の色ふかぬ夕べ

聞声恋　神なびの杉のこゝろかぬ恋ひのふもとの人のこゝろ

山家橋　杉たてよ入る波の山川やくもるぬまの乃いこゝ

阿波国家ゝつゝ波ら恋しまるゝ遠ゝ

くゝ八かゝ雨のたゝみ山ゝ恋ゝ

恋ノ一

恋ゝの杉をたゝみ山杉をたゝみ山ゝ恋ゝ

十二月一日海辺見鶴　恋ゝ人の恋ゝ

ら恋ゝ二十ゝ恋ゝ友ゝ一ゝ恋ゝ

五十ゝ恋ゝ友ゝ恋ゝ友ゝ恋ゝ十二本

[illegible]

十二日草庵の月会

炭　竈

早　梅

幸　逸

[illegible]

宗長居落葉　[illegible]

城外聞逸　（同一本類）[illegible]

名所述懐　[illegible]（と世一本）

十八日[illegible]三七日のをそなふ井の番門院伝

西秀經同院法[illegible]弁雅（希一本）[illegible]

[illegible]

物毎[illegible]

[illegible]

[illegible]

法師

月みてもよくくさむる世をしり馴らし友や思ひそすめし

さらのまにさそふ扇のたよりさへまちかねるらん秋と夜の空に涼しと

廿七日草庵にて人々よみ侍りしに

海霞　白妙の浪のかけしのあさつまに文たしかなる霞もたちけり

氷室　六月のよそも涼しき氷室もなかなか小鍋なるらん

湖月　さゝ波や志賀の浦わも侍るにさやかなき浪の上の月

炭竈　明そめし文ぬつてあすさぬや炭の竈のつまへおもるらん

見恋（忍恋）　くるしさをいはれしやいかにあそてしるあふにあらぬ延世のわさいく八

顕恋　衣手に染たる色のひしかたはしらすとそしる人もさてなるらん

眺望　入海の松のむきのひの光のへむなるゆへたえき松のむらたち

述懐　ワつのなかうちあはれ人なへ名をかはれともやうとし　ちのくまをおもひつて侍る

つれなしやそれきく人の数にふかれてぬれてぬる

永享六年正月朔日試筆とて初の筆を染る

春日影世にこそおほし松なくくんもはやき年に逢ら

三日月のさやかにみゆるをとこく

春と松みゆるこそ春とても霞なかにすめる月影（月の一本）

五日草庵にて人々よみ侍りしに

初春霞　古世のまちまて初るなはらていつの年のか霞なるらん

歎　冬　かつてうる井もの陸のこゝろをなぐさめうさもものうし

駕待恵　偽のある世をもつぬくとやくよもぬもとゝ教えて

田　家　もたなてぬ世のもある民のうもをさぬいのをゆもるまて

八日畠山伝次郎義忠家よりくるこのことをておもてしふ

初春雪　霞一本　うゑゆり星るとをの家たつぬ光とはりるもつ雪

寄鳥恵　はたてよ神の原のとくるなしゆもちぬ偽のうしい海

山家松　屋葉てもむもあるぬ行のあしの宿や儲なるもん

七日承祐法師坊よりくいのうたくおあるしふ

朝　霞　さゝ姫のさゝるあさの神ともこゝ山ちまくこ霞のゑ

春　恵　あるさしし神のゑの梅しふ野をかて霞む月そのこ正家

春　祝　おもをくいさんるゆむ法人もいさみる世のくいは月る

十二日草庵月は三そふ

若　菜　あるくむはをものしのなてをたうみよ稀るゑ八

春　月　もは風みや霞よなゆむん月の氷のおそのむしうえ

浦　松　うの浦の松の高ものちをのうに松もし年分とふもて

當坐三　春　初ものの神やいそく民の神くふや霞よなちまるむ

蚊を火　なをたつる煙のくよ星る蚊ハちるれ引ゑくをの宿

旅泊紅葉　ちをもれもみちの法のうち松野のまの庶もあてのうは母

寄煙恵　ワしよ世ちを楽のあさ川ふゆのおりいのうをたてむ

山家灯　ゆ山の法ともし火をえあよもあしの窓よ世ある垣

二十二日中務大輔照貴の家の月次

餘寒風　天はらの四方の嵐をはらはらとものの音やあらしもるらん

行路柳　里人のみなとの川をあらはるる柳の枝のなびくらむ

寄海祝　つるの浦のなびきの海のおもかげ　ゆたかなるしるしの

濱春月　春の夜の月もなびかぬ浦やいづくとのの社を敷て

忍恋　あらはしてつれなくみるる人あらばやがてこそ思ひの水

遠村鶏　鳥のこゑ月はもるる山のもの影を白くはりの

十八日東下り入道まかりあつまりくるみ分のあるし

海霞　うちもゆる春のあしの名もまぎれぬ入江の波の風をあく

寄暁恋　かくるるかたの川なかの中ふきあるぬ浦のうらん

浮枕

神祇　たちのぼる玉をかさねて大内の神のくもてらしそ

撰分のあるとうかがはるる

二月上旬のころ人々よりもなほ内裏の涼殿のすきこそ

なつかしく南殿のかたをながめやるにふるくもの

おもてにあたりたる花の梅いまさかりにいとうるはしく

さくらはなほさかりなるやうにみえたるをうらやましく

そむけるおほ殿なるもの陣の座なるもいとく

ちかきもみな引籠りなどしてやうやうもしづかに清涼

殿のあたりなどはいとはるばるとしてもの

深くあるのほどなりしかばいとうとくやうやう

もうもうもうさせく人のうたをみえん時のうたをかいるの
のはいてもやうしなるもたちもあそこんはし
くそうるうもうをうたのまいをのうよりかうるをと
たうたのうなるあくるにてそのひうもあ三人からん
あおしくうてもうせうせしまいまいたうる本
玉躰うてくうもうへのたうたうまううんのたうるあ
うもうもうをうまへうしもかうやくたうもしくたあの
あうせはうしまいたうるかうしうなく見をみあうせさ
てまつをしまうのうをうたのうはへるくうらうしもうを
よううあなうをうもうしく

神ちうきうるみうくうきのうをうたあうるうをうてうきてはしき
きうしうをうきうくうをあうきうをうをしハきうたのうあ梅のちへ
きれ枝をかをしもあるはたうせくをうせうをうてうをうを
はうをしまいくうもうてうをきへいをうをうをうきさ
のきうあをうをはうをうをうをうをうをうをうをうをうを
物あうてうをはうをる梅のをの枝ふいうもかうてうきうをうをとうを
七日畠山右馬助持純のあうくうをみうあうをしふ
落花雨　山桜ちうてうも人へうへうをみをやあをうをうるうをうをこのあ
行身亦　ひをあうくはうあうをハ秋今をうしををよう神やのうをうを
海邊雲　うをうをうしはやはをのうをうをうをあをうをうのうを風

本

廿日斯波左馬佐義有（義寒）

門柳　[illegible]

帰鳥　[illegible]

逢恋　[illegible]

山館竹　[illegible]

二月三日東西のむ寒なるよしにて歌仕まつる

[illegible]

[illegible]

十四日中務大輔家の月次

[illegible]

古屋春雨　[illegible]

暮春歎冬　[illegible]

旅行夕友　[illegible]

朝見花（當坐）　[illegible]

旅恋　[illegible]

山家灯　[illegible]

卯月十二日草庵の月次

新樹　[illegible]

郭公　[illegible]

絶恋　[illegible]

當座
折花　身のほとをぬ花をハちらくも折ても惜ふつくえそらにやさらん

萩風　萩原やさらハんしもかれ行秋の露をあらそふ秋の夕川のせ

初恋　まさなくぬる我かその袖色にもしれくる露や袖にこゆらむ

芦間鶴　身をかくす芦の葉の間きかすもしのひてなる涙の毛衣

甚つゆも南無无量壽佛とおのか句のうちにおもふく
人にしらせる中にも

山霞　南　量己家　名をはかる山を山の霞なるなきみなしの山のまさの人

盧橋　つきの子のきらく玉も橋のうへにきさむやなのくもす

廿日光堂俊頼とて人様の杉の老木のあるしを
なかりかく事春あるまても人に影をさくらく

孚非

山納涼　そなたの松水なき涼しく涼しきハ茂る葉をもちふ山のせ

寄車恋　うき数を露にこそこむ道をハよしもさ花ちる車のたち

草庵雨 ナシ类　よもの雨きなぬとても袖ぬれぬ草の庵の世はさらにいつはりにハふ

类ナシ
獨述懐　老の世の友とさむるにしにしの松ハ雲をやおもひいつらむ

五月三日畠山治部少輔義有家にて讀ふに

夕立雲　夕立ハ嶺の羽袖もなちちらぬ衣をあつまらんそのそら

恨身恋　をしはかも我をむらふに立恨人をあやの甲斐になかくな

獨述懐　たちまむかしも昔の友なれやしてゆかぬこるさこの雲

十二日妙行寺日宝上人の坊にて以改る赤松大膳大夫
入道性具なと来りしくにみやみえしに

早苗　汲まもなくの塩やき浦の海人は袖ぬれてとる早苗かな

不逢恋　せくのけふあまを命のうちつゝふるくとみてやはあるらん

寄月釈教　迷ふも乱れてめくるさんの月のいさよひのそら

十八日山名治部少輔持豊家よく月ひさしそふ

夕顔　袖うちの花のうてなの白妙まもなくたるゆふの花

蚊遣火　うち風の烟とまとそよりはるもとゝ汲里の遠やくるき

江菅　思ひとゝたのまれぬなかとなれ身をまとせてやそのうらん

河五月雨　五月雨ハ小の入江の川つゝみまもるうまきふ船の一掉

手絮恋　きぬくハ思ひのとゝそんそ法もふさぬ別のゝよ絮れし

夕雨　思ひ深の夕へとゝまとふるあまとかとゝぬ袖のうへのなる

六月廿四日人〻住ハ〻ゝ屋の上の杜〻ゝ雨ゝとゝきなゝ

ゝく春久ゝゝ祇宜の家ゝく法楽おゝゝ中ふ

霞満村　ゝゝ法ゝの煙ゝみて遥の住むゝの家〻ゝかゝむゝ

岡新樹　ゆゝゝを春ゝかゝく行ゝの杜のゝめゝゝえぬ法の家

秋夕風　身ゝゝの地ゝゝゝん以風ゝうゝハなゝゝの秋の夕ゝゝ

寄鏡恋　新ゝゝゝうゝゝゝしかゝみゝもなりてゝ本思ゝゝゝん

山館竹　紀川かゝものゝゝの杜ゝゝゝゝゝゝゝゝ山本つく杜乃ゝゝ中

七月十二日草庵の月次ふ

初秋露　秋ゝまゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

遠聞虫　ゝ春の春ゝゝ中美ゝ荻の秋のゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

古郷松　をのへよはる松のこゑ（さへ一本）　のみふるみちあふ人もなし

當座
秋夕傷心　世のなかにしの秋のさめしも月のさふまる夕そいとせめまる

連夜待恋　ちとせのの松のあさ衣ちかくいはしのなんはや絶はし

寄海懐旧（述懐一本）　おもかもむもの浦のあしのまさるみくさの波

八月五日治部少輔の家にてよみおさしゆ

山家月　木のまもるたゆの家の苦延やる秋はれは月をとるぶ

旅恋　秋をまつぬ伴とをてゆるを出る月はたの月をて

夜灯　いつくにてとまるもむ文をる秋きをよその灯

十五夜　秋をる月ふ人とあく百その影をさくるく

八月十五夜　月居はそも秋のあるを月を浪とも姑川波

林月　露はこれ林の秋風は月をやとしてるるうき雲

沼月　夜刈の沼のあやめふはる松のもきあはふくもある月ぶ

田家月　山田をるもきろかるいはあはるより竹のたをその奥の月新

月前女郎花　霧こめしをの大野の女郎花月のもみよあて時ぬる

月前玉　ちるいふ玉葉の玉をうたはをくる月やうくん

月前旅　秋のもを家よ松をく宿とあき旅のあはは月をるぶ

月前述懐　ちとせ氏つをれは光とかは思ひ又はの号も月や絶てまし

十二月宗砌利永親尚なく草庵よまるくよ人の月

ちとせかしかしくみをめふ影をさくるく

月多秋友　秋をくく光なくなかるこん秋かくこ秋月の問ん

田家見月　いなをかるあのまろやのうもまろかさも宮めの月どころ　（他一本）

家蓬恵　蓬をこよ笠やいまさく狩ぬる庶も枕も更ぬ風

古寺松　多武ぬ程をやなさ〜庵生の法をる船の杉のおしま

其所を道親尚をさなさ子尚まかてぬるよ〜こ

住るふよみく来〜る　（他一本）

子の引ぬやまなりてい志〜移たかなりるこ〜秋の法

数島やこのなさふ子のたよ来よんのやこいもるて〜

ふく〜

見ひやれさ〜ぬ仏生のお法ふの家仏ぬやのんなふ仏

ふをとよんをるたんをを〜り来ふ仏ふ家尚の家

子花

九月十六日たま つ使ふ ふ ふ一法ふを〜中ふ

祓　鳥　そ九ふの神ふをれかをををくほををやかをんぬをの多家

擣　衣　のふをを〜て住を〜ふの家ほふも狩や昔のれふふ〜ま

爰　恵　あをふ川かをる家せ〜ふる葉のあじをしまい乱を〜て

羇　旅　尚ふなを家の杉家りふをていを杉のふんをんの尚

神　祇　神ふを〜やふめの内おのゆ〜ふふふいぬをふをかをやをふん

大神宮接穂　神ふ〜くりんをを〜ふめる

廿六日ふ尚ふ月次のふをのふ尚ふを〜ふとてゆ法を〜ふ

秋　霜　まをふもふるお尚の杉の杉のをふゆ尚て家をふ嵐のふ

祓　恵　入をむふ見ふの紅葉を見ふ恵の山家たをやゆくをむ

神祇　神となりてこそまもりけれ人なる身の石

廿九日河内国月次

残菊白　おくれゐる新なるさ早の白菊もさてもさてもさびぬ白菊のもと

秋時雨　時雨は猶のどかなりけるを多賀宮まゐる七月乃宮

暁天雞　夜なるのハとゐを八たびまゐるに四方の国の内の

九月雪　七月やなをかすかに九月の月ぬ秋もかすかに雪ぬ

九月雨　九月雨ぬ

十月五日和泉門の神事をのまりよふとてきてくるるきくふんをまらんとく出るるうこ高道教尚卿ふ

ふ[illegible]

夕時雨　ある日を尾ゑるかくく宮の夕のけるまふる時雨ふ

竹間霜　かくれつてくさ〳〵ぬるをもをの竹の葉のうた

白地恋　いさもこたりはるの神の恋を年のうちよなをん恋も

河辺鳥　陽田河の岸の柳ぬるさきのうたなるぬ旅ぬるあな

九日九重つ使のかくく新をたちてとく

寒草霜　秋ぬ草ぬ[illegible]の神の神事ふくちりをとふまく〳〵ふ

惜別恋　ちりふそよ稀なる宿の袖のうみ〳〵き形まる月新

旅宿夢　夢やさむあくき宮辺のまの雨を打ぬをまる浦の松ハ

社頭杉　夢や川少ぬをふの神杉をなれふるるみの〳〵浦

廿八日草庵ふくこうのお宮せ〳〵ふ

江寒芦　霜さえて枯るぬ沢ハまさる江の波さへぬまの浦風
不逢恋　ひさしくもあはぬ恋しまれもぬ沢ハ神もたすけ
嶺上雲　かすかなる又峰の雲ハ花のたもとの嶺の白雲

十一月三日蒙系敏信朱墨一帖

柳似煙　新緑ふかくかすかにやつれの青柳
橘薫風　白雪花ぬる神の橘ハ薫る風にたぐふ
古砌薄　やとあれぬ古砌ハ荒れ田の宮の荒廃
閑中雪　閑の小夕日さしかる松ハ雪の中の雪
逢増恋　山ハ花中ハあるまぬ逢ハ深ハ恋ハ
古寺雲　古寺ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ雲ハ

十二日草庵の月次三首

山家初雪　ふるの初雪ハ人ハ人ハ人ハ人ハ人ハ
旅泊千鳥　波ハ鳥ハ鳥ハ鳥ハ鳥ハ鳥ハ鳥ハ
懐旧夕涙　あハれ涙ハ涙ハ涙ハ涙ハ涙ハ涙ハ
当座
古屋霰　霰ハ霰ハ霰ハ霰ハ霰ハ霰ハ霰ハ
寄露恋　露ハ露ハ露ハ露ハ露ハ露ハ露ハ
羇旅　旅ハ旅ハ旅ハ旅ハ旅ハ旅ハ旅ハ

十二日浮石ヶ浦の家の月次

寒夜月　夜ハ月ハ月ハ月ハ月ハ月ハ月ハ
湊千鳥　湊ハ千鳥ハ千鳥ハ千鳥ハ千鳥ハ千鳥ハ

庭前雲　はらふとて杉のふる葉ふる雪の数つもるをのちるかとぞみる

遠樹深雪（當坐）　山杉の梢の雪の上形をなまきかくれる秋のしらくも

夢逢恋　人を問ふなるひとそとこひ初のうつゝ恨るさとの夢路

獨述懐　ほゝあはれ（八末）　はしさ八今世の中小物うきをあはれとも

十九日　そのゆくすゑとくむ　めぐり中よ中勢大浦

陣中　くもしとく百そのの歌をまつ　まもてその

つみのこゝろ

そゝるはるのさめふも梓弓をはまぬ道をさ絶よ

かるゝ

梓弓はる方代もをさ也さるをはえて法よまの世すゝ

廿八日　草庵三そのの会よ

山雪　新日さしもの雪の川はしもつふあるぬ　のまゝ山

行逢恋　こゝろのゆくへのうつもるあるなり　ゆゆやもつのをさ雪

河鳥　杉の流も（と末）　たまそを神ん代川とのはるのもとうつも

十二月十二日同月はの二そゝ小

冬山　杉原しあのもちもとをつる代ゝとやなるのるらん（も末）

冬衣　新やこきたんやとふどふ人はさもかきさゝふ乃合の袖

冬恋　狂なくんどくんあるぬの浦よぬるむ神のまゝふもも

炉火忘冬（當坐）　まきのやふはさ水く泡を素ゝるぬまゝ浦きゝ山のそゝる

老後恋（類ナシ）　たゝきゝもる品の三形打暮て清む夕へのゝふもをゝまつ

暁見漁舟（火光イ）　近き小舟あくる汐の海岸よさしおしよせてかへる漁りひ

其ひかりとの風痛く西岸もちらち係なくひきてふし

傳るよ海の波をもすなり

なむくれもさや立なれ春をき飛もさかえてちるをまゝ（文一本）

あくし

雪深き松の梢もかく枝つたちちなびくゆきをとくしく

十九日河波ちるくく八條殿大夫ともに傳よ家の月はひとつのまゝて

浦雪　深松の根もく梢よあつまれく深く雪の雪乃風折

歳暮　むくしけ起の浪のちたみおきて衣がうちさき年の暮かな

尋恋　行く末ものおくをかへてまやたくくハえてらち島なりとも

子根

（當坐）朝雪　ありけるみ家の月の影くくらまでをつきて雪やちるらむ

寄鏡恋　くもりなき恨みの色つまくらみ見る鏡の山鳥の尾より

述懐　思ふなる身のいかなりやはにものあふぬつきまの影やならす

年の暮れあまるさまさてあるさにて人のはかなきけるをとく

家居をもとせくまそも年のはかなくなる暮もちるまた

同八年九月廿一日畠山右馬頭持純同治部少輔義忠

松坊兵堂僧都子（小一本）并正庵など後鳥羽院の安楽陵乃

御法をたてまつるさ坊の僧ゝ法影をかく彼岸の事を

冠よおきく一讀僧中よ

こゝろをそそらけてかきむけるに御歌を

みもとなひ

當初長谷寺は一七日參籠し侍るに下向の後相模國ふ
勝定院殿參詣しよ代さいまつをまくいのなるおとの
とおもをもしりて申と侍るこの中ふ

あるくそよ夏の月千(十二本の一本)もまつをふとの一の陸のあとかとくく
おろし法のもるもゆなるつもるふるかなる乃すき
ゆ源氏の耕を和尚さくきもえ氏そのうへむのまて
とどまるくるさのなりまさ侍る後ものをを
たるもをもをしふふこのまふこそもをを(引一本 侍一本)
月やあるぬもやむのまなるぬ秋多ものあるて
日くるせいあ人まのまさをもる嶽の嵐の秋を年して
冬氏の秋ふ角東洞院とる倉の百少のつの百ふ
春日西洞院なる糸ってうつるをみ侍るうう巖栖院
京兆うをを屋いのをのたつをせ侍る返すふ

こゝに居も敷のうちのもと白妙に寄せ人深き子のかたへそ
おなしき年二月に景積正盛清阿法師なとつまりて 信一本
長谷寺阿弥陀院にとまりて一七日こもりけり
十八日南無仏宝号を冠におきて十七首法楽を
しけり 叶一本

な
志
う
免
む

春

名にさるさよの人の清のうへは猶霞あまさえてあくるまちなは さ一本
志るしらぬ神にいらぬ梅かえに折なしやらはゝその月
うち氷おるハあれは神風にのもやくもまさる春のな
めくみしに浦への縁のむかくるハまのむよりあふそ稀なる 子え

雑

むのためにふしめハもつ捨ともいはし世を捨そらともみ

字柏

れ
清

おかしい人山もこの山にかなしくハ宿をさしき世のかたくのうしろくよ
津くつかくや七秋を蔵はすまれの月ハくもらし
應て氷の秋の行に俊ことのあいく石山にまうて傳ふ
佛生の正面のもしらよりて俊のさ清くらまとして
もるゝなる南の海の補陀らくの石のうらにも法ハ春まふき
手そその華とらもくかきらさし
清くるもちつまく同し波のうるまの海ともゐてぬへの秋
その後廿四年をへさ栗津ふさぞ見に候てる同寺
ふ法くもりし俊子のかたまりしおもとらへしふあともちかくさえ
くところくあるしをさえにみえさく

[illegible]

同時源氏の間とて局の後ろにかくれ居たり

[illegible]

永享十一年八月廿二日人々[illegible]玉津島に参る

[illegible]寺に宿をとりて[illegible]

[illegible]

[illegible]

玉丹生の中屋をたづねて

[illegible]

[illegible]

玉津島の社[illegible]十[illegible]法楽

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

和歌浦の夫神のまつ

[illegible]

いとのさかゆく杖のさきつくのさつ伝る

[illegible]浦とゝむ風の行るいとのまゆ

いかゝ風もかゝみあるまさゝちふつかゝ島のあとや清なん

同十二年五月中の十日あまり[illegible]和歌玉伝[illegible]

藤原良[illegible]家に四五日ばかり侍りて一[illegible]

五月雨晴　[illegible]南の海の五月雨はそのゝ家のそとむち

[illegible]

盧橘薫袖　[illegible]

窓風急　[illegible]

旅宿夢　[illegible]

同時旅の面のゝ[illegible]

おのゝ[illegible]

同[illegible]泉州松尾寺乃児のゝ[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

鳥ふるあと

[illegible]の詠やさびしき浦なれん（八本）杉さへあらぬまほの遠風

まさ青の月の影鳥ふるく水涯を洗ぬくもるつのそそむ

如[illegible]るもしら寺あるまあるとはるもしら西方院とふ坊

ふるく水をあるもしらハ山ふるの詠る山ふるかきつける

山ふるのくるる水をみをぬ家ふるさしら山ふる家あり[illegible]る

常神二ゑのおを皆冠ふおきく一所ふ詠もしら

あるをさてもまふふふの神ふ[illegible]るみて一ちつとめこ

きみふふふふそふ果ふとめもて家ふ如て奴神のもたひ

ものもふ秋ふハあるぬ家ふそも詠ふをほしおる家ふと

（油一本）

もらてやへ人も涙をかくしそて物あるものあのさもしろ

やそてやへんそそうる月芋のもそもたきてなもと孫水と（月日一本）

ふふ物ふふふの詠ふハ芋ふ本もつ一屋のお栽

さふ後まふふるもちるふをふせめてハ手のふそたふる人へく

むふさ[illegible]のそ[illegible]の近ふを思ふふもれふとふる人のゆ[illegible]ふ

そそふふもふたふふの侍ふとあてもふそそ神のふつそ

むさふふの月の歌ハへて孫ふ[illegible]ふ家ふさほとのふるそさ

ゆふふなふもひふふ一果やふもふ後をふ行る遠の行舟

ふるそ月やむふの月なふぬ後のおハを行のるふふ

やまふのふもふてもみそふあふ後ふ家ふとふ舟ふくふそ武舟火

まよひぬへくおもほえぬをとつれし雲井にたちかへらの桜戸
かけのきるも見まほしきぬ別路に袂わけゆしのよるのふしはらを（と一本）
せきかへぬ涙の床のうへにうちよるまて鐘の音くる
のちにまさへたれん袖の上にかくてもうるなくもの音その橋その
をちかた一よふりしよのかぎり袂にもなくさむ夢をみさせつるに
こゝろかくは思ひよりてへうつ袖をやすくへん枕のうへをみ
らくしもに我ならぬいのちをおきさらん人めもしのぶみのあはれ
のまにまにかくのむくひよきにけりてくもるにくもさきにのまの
さりとかく恋するをえらふたまのいまさんたえまのそく
ところへにしつの井のなかさきにいるむなしき夢のかこと

丹鶴叢書

ますかゝんものへもくいとてしつまらんこのよるあはれのしらさく
宝にて昔の涙を思ふにもまた逢瀬はかしこき中河のやと
ころらいの枕のくまなき月のおもかけもかは見し浦島か箱
をしはなよあけてもえりける袖の火を涙もにぬかりすの須磨の
うきふのみ涙にかはりしその下に枯ぬんやゆえのことのそくさ
法しくもかくみけり忘れぬさのもの筆のきもゐへやかにみかゝん
なかせんみにもよひまて袖ぬらしおもふのみなるめにきけき（八一本）
つんきさし身は何ならし袖とれんとめしとりにならみこそ

冠のうた

枯るもやつさむやしける山風の都もの里よそろうちもうらん

沓のうた

恋わたりつゝおもかけにて見るの涙もうしく床のさむしろ

又清水いなりの山にまうてゝくへの清水のおもかげ
侍るまうる井に立そ

このまをはやの神の恵といなりの山のまつりをん

此水弁井に一石しとりにほあり

鳥かなく東のうにはなひくし一のくに乃やまのえちの宮ま

破鏡山

くもりなきかゝみをおもてたすけてかみのちらのまた月

金花山

花よりもちるくの黄金花さくはこのりし十峯

法院 葉師 筆

影清き羽白入日をうけるやすらひのこの比えなるらん

嘉吉二年卯月十日比叡山三塔巡礼のためまうてゝ人々
ともなひ於法花法師還(運一本)能を先達にて谷々めくりし侍し

同十一日無動寺十妙坊にて詠る

春朝霞 朝あけの風もまたさえの浦に立ち[illegible]やかすみたつらん

湖蛍多 月清しいさり火ともぬ蛍さへ浪にうちたる[illegible]のうへ

隔遠路恋 我のみよいく里の海川もへたつるを[illegible]の雲のうきみ

浦鶴 松かえまつむなのこのまゝや浦にかゝりつる鶴(よ 一本)

同十三日東塔南谷相蔵坊にて詠る

卯花 [illegible]の雪かのかゝ八重るをと卯つき[illegible]思ひむかのかれ

見　忍奕
旅宿
神祇

十三日同谷長壽坊にて

孤島霞
採早苗
山月明
川千鳥
家琴恋
山館竹

十四日西塔六所の彼岸所にて詩作よみ侍る

樹陰蟬声　杜奕
家戸恋
洞　擔
杜　柏

十五日法川兜率谷善法坊にて

春洞霞　のこ奕
扶路霜
家山恋
夜釈教

十八日帝釈寺にて安楽寺なりし和延礼の行ひ

[illegible]

同じ樂を小宰相の墓にて

安島の中将

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

十七日唐崎に日吉法華人[illegible]中将

夏

天[illegible]

神祇

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

六日甲子日也八幡大菩薩御誕生の事正月
朔日甲子の日と承及侍るを思ひ出くるまゝ
二日山之系傳家入を浄元ヶ崎にて
[illegible]
歌
[illegible]
百畠山師重入を賢良の亭に伴ひまのこゝろ
[illegible]
鶯告春朝　[illegible]
岸頭藤　花房（さう一本）[illegible]

神に請ふ　[illegible]
旅の友　[illegible]
十七日三宝院の彰つを普門院に大伝正教異説を
[illegible]
山も盛　[illegible]
晩春　月もしろく[illegible]
海眺望　[illegible]
十八日武田治部少輔信賢の家の月次
緑竹久　[illegible]
遠山雪（當坐）　[illegible]

隠恋　たちくゝはあさくそのゝ秋の夜の月をとゝまるそ泪なりける　七一本　その月上

田村烟　夕まくれこゝろ山風よはる田中のさとのむらさめ

十九日日吉中納言勝光卿の亭にて月のうた

梅花薫砌　やとの梅ちるかをせはつとゝくのとりの声のたかむも

当坐　八一本

残雪　やまもとのこゝ友とまつのあけぼのもあさきものらはみ　こゝち楽

落花　ふくかぜはなをちらすとをるさくやえをもとゝんん

早秋　いなとりの見ひのそかそうくるもの一ひ秋のこゝろ

冬月　ふかはやゝ雲も氷もとる雲のうちとつもこゝぬ月かな

寄雨恋　なのむしの見ひかぬあまの秋さいぬ中もちまん

寄橋恋　ひとりこゝはくゝ人のゝゆくゝんとゝさゝ夏のうれ

水郷　九をゝめもいくとせむしんあとゝ風日ふあ人のゝとゝ

廿一日伊勢守貞親家の月次

梅花盛開　梅ゝまてよもはゝまてとちりけいとのむまあくふくむ

当坐

春天象　なつく雲のたゝはちよもこゝとをむ彩の雲あさとゝ

恋地儀　こゝもゆゝ雲のこゝとゝ雲ゝあゝ恨よくくんを

夏雑物　冷くくとゝ秋とゝあくゝ夏のゝ雲のつつの月のあさを

廿一日時房朝臣の月次

庭梅盛久　梅ゝしふとをゝものちゝあまよをゝくゝ世を宿ゝめん

当坐

窓前梅　窓よくゝゝみつるゝをゝとて八行ゝとゝもる梅の上風

寄柏恋　なのゝさつて恋ゝのゝものゝ稲葉をとる神ゝゝるやゝとなゝ

思往事　うしやくをもつてもつかぬをもうらいはふかりしよ古をもふ

廿三日一を左の丈夫義秋の亭の月次

杉樹契久　ちよのあるさて十のうちををりをなんををるすぎのえだのあるハ

惜花　しくしくひるるも恨めり桜も風のあるなるまつ波ちるをを

忘恋　秋ををるをふあるぬをるをたのをぬ物のなのむをやをん

懐旧　まをろをん人ををなをををぬるを昔をしんをんをふ

廿四日細川右馬頭入道覚の家の月次

河水流清　あををををををの川をををぬををのむをある春をを

竹間鶯　緑なるをの井の竹のをふ花をををををぬうををををなく

荻驚夢　ぬるを原ををををををの荻をの風のををををををををを

雪朝望　秋日影ををををををををを

霞障松樹　[illegible]

浦早春　[illegible]

春野　[illegible]

寄蛛恋　[illegible]

洲鶴　[illegible]

閏二月九日常光院竟孝侍従の坊にて

遠村霞　[illegible]

落花　[illegible]

後朝増恋　[illegible]

鐘声何方　[illegible]

廿四日右馬頭の家月次

若草　[illegible]

春曙　[illegible]

田家　[illegible]

残鶯　[illegible]

寄閑恋　[illegible]

旅泊　[illegible]

夢　[illegible]

廿七日東福寺出世界のもの[illegible]

依花待友　[illegible]

三月一日三井寺にて人々（中本）さそひて花見のもとにて

いそがしく毎のもとにて歌をさぐりて

湖上霞　さざなみの霞のうへ伝ひまき風にうつる岸のさくら

見花　二なき契もちぎりなれなれもちりぬべきゆゑ

雲鳥亦　春てきぬやはちぐもむ白雲のとぞまきてきぬの杉の

晩鐘　おとつぬるこの秋てにもあきて清なるこゑるゆゑん

廿三日たゑたまの家乃月次よ

蛙声遠　水ひろきもみぢもちぢぬ板ゐよ野なる蛙の形

山家暮春　もちもいぬ鳥のふるこゑさくゆん歌の宿をとうみハ

忍逢亦　ささいそぬもの歌しまのかよこあるとさうの春の名ゑ

子規

當坐

きくにあく　きくのもしもの絵とやきくにあく行ふのこゑとなきくきく

歌くのもの歌　花もをもの歌たつなをむくりる月歌くぬのもくの歌

杜のあつまを　人を待ぬくに歌かくきて初時の杜のこをとふのもの

おくものもの　こをかくて杜のこをよおくこをのからさハのこをおくむ

ホあり絵紅葉の月次よ

歎冬露繁　霜もにくるのこをの露の数かくにおくのこをふこのむ

留春不駐　もくて杜ゑ月の弱のゆくこをハのこをきのつふりつなきこをハ

依亦行多　うけの秋いくるをるのよも社のこぬこをもくおゆこを

當坐

暮春風　日数へくこをにくるの絵とふうかこをしに風もくるもを

暮春虫　ふをこをあるもくふもをもくのふこをくて鳴ぬを杜の多

春顕恋　くれなゐのいろをかへてはるかぜのいとをかしきはなのかつらかな（うき一本）

春述懐　かすなるとものもしめてはるかぜのとをくにほふはなのかつらかな（と一本）（ほふ一本）

晦日中納言の亭の月は延引をきかれしよ

暮聞蛙声　深草のとよつくるゐもあさかれとはるかぜはたはたくれなゐ

藤花始綻　かつらちるはるのすゑのあはれとはいはれぬものはあさかすみ

毎名立恋　たつたやまなかなかたちるはるのはなはいかにかはるかすみ

当座　栽花　さくらはなはるのはるのはるの

家後述懷　もぬぎたかけるこのみをいとゝ多ふすの併何のたたつゝむ

待郭公　時鳥ものの山のをゝ（本）ぬけもゝ社一本ゝ多

家石垣　小とのゝよさるもまれくハつひまもひの流をやハちぬ

江舟　ゝる江のあまの小舟ふる雨よ起ゝる笘のもゝのゝよ

廿日草庵の月ゝよ

嶺上彩樹　まゝさゝも葉ゝまゝ木の紅さゝて松あゝ欲のゝ雲

新ゝ一夢　時鳥人ゝ夢の起ゝハもふもゝ明ゝまゝ（や一本）ぬ

長川似帶　なゝゝゝるふゝのゝのゝ小川の石のおゝめゝ出る

當坐
閑扇　多ゝゝハ雨ゝ重ゝ多ゝゝ出ゝ秋風のゝゝふゝゝむ

立名恵　おゝもゝ葉なゝゝ名ゝゝ知ゝもの人のゝゝあゝ無ハ

子規

田家老翁　小庵なゝ口ゝ四ゝ門ゝ裏ハゝ庵ゝ民の樵雪ゝ

水郷煙　いゝゝするあゝの遠ゝもふゝゝ人ゝの釣のゝ舟ゝゝ

五月廿ゝ九夜の月あゝ

靈橋薫挽　橋ゝもちゝぬゝゝの宮ゝゝゝなゝゝん乙博徒のゝゝ

五月雨暗　さゝゝ孔ハゝるゝあゝゝ春の夜日ハの雲ハかゝゝゝ

當坐
窓埋木恵　あゝゝゝゝゝゝの谷の埋ゝ庵ゝふ水のゝゝゝよ

當坐
夏　木　ゝゝゝゝ花のゝゝゝ一秋もちゝぬをゝゝゝゝゝゝ

夏　衣　ぬゝゝくほゝゝいをゝの遠ゝのゝゝ孔ゝゝ夜八日毎ゝゝる衣ハ

夏　筆　あゝゝゝゝゝゝ

霞　[illegible]

鹿　[illegible]

雪　[illegible]

寄虫恋　[illegible]

夕　[illegible]

六月廿四日右馬頭のもの月次

水辺螢　[illegible]

夏月涼　[illegible]

山家路　[illegible]

當座　鮠夏蟬　[illegible]

別恋　[illegible]

猿叫峡　[illegible]

同晦日俄題夏の月次

雨後蟬　[illegible]

川納涼　[illegible]

待空恋　[illegible]

當座　晩夏　[illegible]

懇切恋　[illegible]

田家路　[illegible]

七月七日夕　七夕のあくるよ七夕のよるの中よ

二星適逢　天の川のあさせやこるらんわたりもとらぬ星の舟の

七夕糸　きりぎりす織りしの糸をしるべにてあさぢが原を天の川ふる

秋悔恨　ちるもみぢかくれぬ秋のなかるるなごりをやしぐれ雲の下

秋古宮　松風も絶えぬ秋いつのなごりをものの古宮

秋旅行　秋ふかく露をそかぞへさらるる袖のうへに移りの人のね

同夕海辺恋　なにはがたのつやをもいかにたまつるさ秋よむらふんふ

寄秋山恋　人ふるをとりとふんからさ多の秋の山やたのもん

秋朝雲　山のそふ彩るる雲に霧たれく後の日新のとりてるあり

秋夜夢　恋ひそうきまどろんでやこもふるなりさしぬるよりもくめさめく

秋汀鷺　秋の江さむさ汀とおのこもとりもとりて後るやふん

廿日草庵の月ふよ

萩驚夢　秋風よさあつる法ハ萩のもの夢ハ驚の夏をこふ

暮山鹿　物ものやこ月ものの鹿ふ鹿なのこをを鹿ふ

寄露恋　そもなりなるこ露ふ恋こるんの色の露ふ

月出山　みなこ山新をうつて月の舟漕ぐ嶺の天の川波

暮秋　もの秋よのこ色てこ秋ふる月出ふ秋もふ色

寄心恋　神庵のもつもて庵やつこ恋んのあこもこふよ

釈教　仏ふ法こもこぬ人ふこのこ法ハ海こえ色

八月十五夜俳諧大会の家の月会

放生會　やそしま山もとの秋の秋さぶしとなりる岸の松の秋

終秋月（深一本）　まひのまふ所ぬしとなるをたなるふもしまの月ともるらん

不見恋　ちりさりきりなくなるる海のうつまぬ小島の松の梅ぬそ

月前星　海のうつ晴いるほしまはやむひの夜は月うさふきぬ

月下杵　月おろ三世のさとりの杵原たそりとをぬこをを悟れる

寄月恋　月とをんくのおくを衣ハ山のあるるふとりつるをちこのハ

廿四日右三位為の月会

水郷秋夕　そそしまあら川霧をふもうるあらうの秋のうをを

雲収月明　あやまるにはひをの一むハてる月をてみてをまほ

夢中逢恋（当座）　思ひつぬるなをさふ逢をんうこのをしひををの夢

欣驚夢　昔こそおとろつ一つを藤のもの風まつ夏ハさめてうをぬ

絶不知恋　契つる人のひくハ天鬼しの新の鳥のゆうををのあと

述懐非一　なるるをさふなをかんなおのはよあぬ世をも住ハ

廿七日俳諧入夜浄元神く月会あるしふ

松契多年　松をしおれのをまのをハをいろよをくてもをく松よ幣ハ

初春霞（当座）　をるをさハ山ををのをちりたる物や霞なるらむ（そむ一本）

残月　ひるをの月ををつる山せをもをめハはるあるふいををハ

搗衣幽　つをいる宮ををもれはるをふををのをうつをを（ク一本）

欲歳暮　くるをちををれやをを月をを高をを人のあゆをもはるはる

犀待恋　はつかなる雲おもてをまつよかな　神よみる秋風

晩　撞　ちつるくゝ夕のほのそらをやいるゝ人も浪おつるむ

九月九日重陽　浮世をまもりそるてそ

そゝもくちるそこのてそさらゝ歌を送らも

菊延齢　花の露うけくやゝとのまくん菊うる市の秋の佳人

山家恋　酌おろ仏水惜のこのさ代まはかさくらもの川浪

古寺鐘　神をムとの雲のおくの陸ふ三の雲のあゝをそよ

十月十六日伊勢入道浄元をおくるなひく嵐ムのあ

葉をうよいそゝよ素龍院ちろ沼まく歌をさくそて

初冬嵐　秋月お葉安ゝくムのあゝのかるのちる秋のな

雲の星恋　新まもし日新まもて沙星の入さゝぬもみそぬ恋ハ（ん本）

雲雲恋　くゝそちるうれく思ハハそゝふ思やふふるさ恋のもしめを

橋上苔　大ゐ川月のひうをまちゝ水葉をなる苔のつるもし

九日草　ちくゝまく清ふのあゝしよ

落葉　いゝ移んまるよ水葉のちゝの雲を思ひめゝくムをのさ風

欲別恋　ゝゝれなく思ゝさゝの恋のゝをあゝまくあひ媒もゝし

暁眠易覚　ゝるゝらむ起りまふ初雲くもおきゐるこのかく若ゝ（八本）

十二日もゝくゝまゝゝゝくゝる恋の雲葉をゝんとゝそ

ゝゝゝゝる歌をさゝゝゝ

山中落葉　流川の雲後ゝくゝやゝるゝゝをゝゝ雲て花水のゝゝな

悲心離恋　行末もくんの孫まなれとさて世といぬ岸よ舟うつるもむ　うへ一本

山寺懐旧　我人をしるもの古き山のをさきのまゆのまゆのえ

十三日大草隠岐入道孝跡月次さくせーよ

橋落葉　ちる木葉谷の小川をうつむうもあもれなる家のかなし

枯野朝　あもうつ枯野の雲の新蒙よるもむる日かその秋のくれなる

山館雪　新々の多のうきにれのもうきもむのうきやきれうむ

当座時雨雲　とうとう時ぬ雨のくれるや時のまうぬる紅かもむ

家畫恋　うかくれくれと契れく時の日新もきくれかひたのうー

海辺風　うる浦のあきうる浦をうー舟もさかかぬ風をあるる

其人蓮花院主春林和尚夢想のうあうとうとうもあきう

うう一見多つうもちく堪もはくたまううもーつ

おこうのうくうつまひーう

武道八一衣のうかうーかみのううもうのもの

金剛の西仏なるハうるるるる毘盧頂上ふまるもあれ

若和こう

うのうの玉うつうもみきうもう一衣のうかうーかうる

金剛の西見なるハうるー我毘盧頂上ハふみもふまるも

廿七日中納言の亭の月次九月分延引をとうるーみ

野徑鶉　もうのうーー神のうーうーうもれうるーー世もやうん

秋時雨　武秋も時の雨と清やうて狩宮のうるうるうもう

人傳　恋　えそいきぬんのうちをかさそうまるひうれしをとさこそ

當坐
初冬　天津人ともたもしーしをよハみさむしーてはをそ衣そ

炭竈　こんのやそ炭をぬそこあてかるをけうそたつむ

別　恋　かそこんそのをふまのてをくさハふ浦よめまるんのをそそ

羇　路　ほそそををうつほよちるむの光しまるやつ羇ほまそ

九九日そ庵の月ほよ

時雨晴　をれぬそハ時ーそのををうたそ宿をそぬそ秋をふをし

椎柴霜　ほほををそ清ぬ柱そ第ハさをきくをまるををたてのをー

不本

寄鳴　恋　まるのををたる浦ハ神をそて我ま多ををぬ下のかをいち

當坐
時雨　たをそをうをまをかををのをむをふをー秋のをみハ

冬　月　なほはる月のをつのをれ雲山をやをふく新をををを

寄木恋　我神よむちんかをんほほを秋のあのををおほる浦を

懐　舊　ほををくをれぬををけの一ををあをぬををのをる人

十一月弱日典藥頭藏長新庄平砂三浦ノ名ををれる

つをて浦をのををーのを一ををみてををー

をむををほの浦をを神をを厳ををて入日のををよ浦を一人を

三日五つ過ぎ浦の家をを浦をあをーに

朝水鳥　ほを浦をつ雲の新をのをほ雲をををかをるをーの一をを

屋上霞　挽て柱をの風ををめをて雲ををををををつあを丑をの

恨　恋　をみをて代をををををんをををををををををハのを

古寺灯

畠山匠作家詩哥合　落梧新月

以下二本ニナシ

七月十五日

雪中路鳥